

# 心理援助者養成教育における「傷ついた癒やし手」 というジレンマを指導者はどう考え、 いかに対応するのか —文献展望をもとにした一考察—

林 智 一（医学部教授）

## 1. 問題と目的

### 1-1. 問題意識の萌芽に至るまでの経緯・背景

筆者が現在、所属している香川大学医学部臨床心理学科、大学院医学系研究科臨床心理学専攻は、国家資格である公認心理師の対応校であり、公益財団法人日本臨床心理士資格認定協会の臨床心理士養成指定大学院（第一種）でもある。筆者自身は、当時まだ数少なかった、心理援助に関する専門的・実践的な教育が行われている大学院で学生としてトレーニングを受けた。それ以来、四半世紀ぶりに、今度は大学教員という立場で心理援助者養成教育に関わるようになったのである。

しかし、そこで心理援助者を志望する学生の質の変化という現実直面させられた。たとえば昨今では、過去に不登校や被いじめ体験などを有したり、深刻な心理的問題などを抱えていたりする学生が心理援助者を志望することも少なくない。また、教員やスーパーバイザーからの指導に対して、打たれ弱く、傷つきやすい学生も存在する。

このことは、他大学教員との情報交換の際にも、折に触れて話題となる。それだけ心理援助者という職業が社会的に認知され、以前には考えられなかったほど多様な学生が職業としての心理援助者を志望する時代になったものと推察される。

ところで、心理援助者は、心理援助活動の中でもとりわけ心理療法に自分のアイデンティティの基盤を置いている（鏑、2010）。心理療法とは、「悩みや問題の解決のために来談した人に対して、専門的な訓練を受けた者が、主として心理的な接近法によって、可能な限り来談者の全存在に対する配慮をもちつつ、来談者が人生の過程を発見的に歩むのを援助すること」と定義される（河合、1992）。そして河合（1992）は、「クライアントの利益を守ることを考えると、心理療法家の専門性を大切にしないといけないと思う」と言う。

また Garfield（1980）は、心理療法家に求められる資質として、「心理的問題を持つ人びとを援助したいという人間的な欲求に結びついた、人間への深い関心」をあげている。その上で、「個人的によく適応し、障害を持つ人びとの治療において悪影響を及ぼすような個人的問題で妨げられてはならない」と述べている。さらに、心理療法家は自分のパーソナリティや問題が、心理療法において不必要な妨げとならないように、自分の葛藤領域や他人への反応の仕方を意識しなければならないとも言う。そのため、アメリカの多くの心理療法の訓練センターでは、心理療法家の志望者自身が心理療法を受けることを必要条件と

している。

他者を「援助したい」とか「人間への関心」を有するといった言葉は、心理援助者養成校の学生からよく聞かれるものである。一方、Garfield (1980) があげたもう一つの心理療法家の資質である、自分自身が「よく適応」しているかどうか、すなわち「パーソナリティや問題」、「葛藤領域」、「他人への反応の仕方」については、学生にとって暗点となりやすい部分なのではないだろうか。

他者を援助することばかりに気を取られて、実は自分自身が援助を必要とする危機的状态にあるという認識は持ちにくく、その可能性は否認されやすい。学生自身の過去の傷つきや現在の傷つきやすさといった問題は、その最たるもののように思われる。

ところで、心理援助者として心理療法に関する学修を進める上では、文献や講義、研修会などによる認知的学習だけでなく、体験的学習が不可欠である（一丸・児玉・塩山、2010）。その具体例として、紙上応答訓練、ロールプレイ、試行カウンセリング、そして心理臨床相談室でのケース担当とそのケースについてのスーパービジョンといった実習があげられる。

そこでは、単なる知識や技術の修得にとどまらず、学生自身のパーソナリティや対人関係の特徴、倫理観、ひいては人間性までもを含めて、自分自身と真剣に向き合うことが求められる。そして、傷つきを有する学生にとっては、みずからの傷つきと向き合い、それを克服したり、そこから回復したりしていくことが求められる。

では、心理援助者の傷つきは、どのような問題を生じるのだろうか。たとえば寺崎（2020）は、社会の中にある暗黙の理解として「同じような経験をした人でないと理解できない」という考えが根付いているが、「不登校の経験を持った人だから、今まさに起きている不登校に深い理解を示せるか」というと必ずしもそうではない。むしろ、それは障害となることのほうが多い」と指摘している。

筆者なりの理解ではあるが、ここで指摘されている問題点は、心理援助者が自分自身の不登校体験に縛られて、今、目の前にいる不登校の児童生徒もかつての自分と同じ心境であるはずだと思い込んでしまったら、そこに心理療法の根幹たる共感生起しようがない、ということではないだろうか。ここからも、過去の傷つきや現在の傷つきやすさの問題は、心理療法に悪影響を及ぼす危険性のある個人的問題のひとつであることが明らかである。それは、前述の河合（1992）が述べた心理療法家の専門性にかかわる問題であり、来談者の利益を損なうものである。

なお、心理援助者としての傷つきの問題は、なにも教育課程だけに限ったことではない。心理援助者養成教育を修了し、心理臨床の現場に出てからも、クライアントと関わる中で、心理援助者が傷つくことは多い。

Hirsch (1992) によれば、対人関係学派の精神分析家である Levenson は、分析家は傷つくことに対してお金を支払われている、と述べたという。対人関係学派の分析家は、伝統的なフロイト派が強調してきた客観的・第三者的な分析者という自分の役割を壊して、

分析家である自分がいかにクライアントのトラブルのパターン反復に気づかずに関与してしまっているかを、クライアントに伝えねばならない。それが分析家にとっての傷つきなのだという。

このように、心理援助者は、絶え間なく傷つく可能性の中を生きている。だが、そのような数々の傷つきを生き抜き、克服したり回復したりしながら、来談者の利益のために十全に機能し続けることが求められる。つまり、ある種のタフネスやレジリエンス（回復力、復元力）が不可欠な職種なのである。

ただし、筆者は、傷つき自体が絶対的な阻害要因だと考えているわけではない。自分自身の傷つきが臨床心理学や心理援助に対する関心の発端となることもあるし、ひいては心理援助者を目指す動機の一つとなることもあるだろう。また、自分自身の傷つきやすさが他者の心情を細やかにキャッチし、共感するための繊細な感受性の表れであるなら、それは心理援助者としての武器ともなる。実際、自分自身の傷つきから回復したり脆弱性を克服したりして、よき心理援助者となる学生も確実に存在するのである。

心理援助者養成教育に携わる大学教員やスーパーバイザー（以下、教員と略記）はみな、すべての学生にそのようなこころの成長が見られることを祈りながら、教育にあたっている。ただ、傷ついた学生をいかにケアし、教育していけばよいのかという問いに対して、じゅうぶんな答えが用意されているとはいいがたい現状なのである。

その点について、一つの視座を与えてくれるものとして、「傷ついた癒やし手」という概念が想起される。ここでは、「癒やすことのできない傷を負った癒やし手」があり、矛盾することではあるが、癒やしの力をもたらしのはまさに傷を負ったことそのものだ」という Sedgwick（1994）の言葉を定義に代えて紹介しておく。「傷ついた癒やし手」の詳細については、次節で触れることとする。

## 1－2. 本研究の目的

傷つきは、将来の心理援助者たる学生にどう影響するのだろうか。そのケアや教育において教員は、どのように対応すればよいのだろうか。本研究では、心理援助者養成教育における「傷ついた癒やし手」に対して、そのような学生の教育に携わる教員および組織としての大学・大学院に可能な対応やケア、教育のあり方について、文献展望をもとに探ることを目的とした。

そこで、文献データベース Scopus（英語圏の論文データベース）と CiNii（日本語の論文データベース）において、それぞれ「wounded healer & psychotherapy」、「wounded healer & education」、「wounded healer & psychotherapy & education」を検索語としてヒットした論文について、本論のテーマと関連するものを選択的に収集し、考察した。

なお、検索は2021年10月10日に行い、Scopus で「wounded healer」が232件、「wounded healer & education」が38件、「wounded healer & psychotherapy」が28件、「wounded healer & psychotherapy & education」が5件であった。CiNii では「wounded healer」でヒッ

トした 10 件のみであった。

## 2. 「傷ついた癒やし手」概念形成の経緯

### 2-1. 始原としてのギリシア神話

ギリシア神話の医神アスクレピオスの師ケイロンは、自分自身の不治の傷を癒やす術を模索する中で、自分以外への癒やしの技に長けたという。これをもとに「傷ついた癒やし手 wounded healer」という概念が唱えられた (Benziman et al., 2012)。

なお、ケイロンは、半身半馬のケンタウロスとして生まれた。誕生の時に我が子の半身半馬という姿を見て、母親は悲しみのあまり神に祈り、自分を菩提樹の木に変えてもらったという (Jackson, 2001)。

すなわちケイロンは、その姿ゆえに母親に愛されることなく、ネグレクト (育児放棄) という虐待を受けていたことになる。現代的視点では、それもまたケイロンにとっての傷つきである。

なお、この物語には、そのほかにも興味深いテーマがいくつか含まれている。名医であるケイロンも自身の傷だけは癒やせなかったという点から、いかなる名医も自分自身の病は自分では癒やせないという教訓が読み取れよう。また、ケイロンは、不死の存在であったが、傷の痛みには耐えかねて神に死を乞い、叶えられて死んだという。いわば積極的安楽死である。

さらに、アスクレピオスを傷ついた癒やし手とする考え方もある (Sedgwick, 1994)。アスクレピオスは医術に長け、人を救うのに熱心なあまりに、ついには死者をよみがえらせてしまった。これは当然、自然の理法に背いた行為であり、冥府の王の怒りに触れ、結局、ゼウスの雷火に焼かれて死ぬこととなるのである (呉, 1979)。

いずれにせよ、ともに名医であった師弟がそれぞれ傷ついた癒やし手として捉えられていることは、興味深い。名医たることと自身の傷つきには深い関連があるのだと、多くの人が考えている証左であろう。

### 2-2. 分析心理学における「傷ついた癒やし手」

心理援助者として「傷ついた癒やし手」に最初に言及したのは、分析心理学の祖である C. G. Jung だと言われる。Jung (1951) は、心理援助者の逆転移に関する論文の中で、「より深いところに達するあらゆる治療は、およそ半分が医師の内省にある」とし、「医師が患者において正すことができるのは、自分自身において正したものだけ」であり、「自分自身の傷つきの分しか、医師は治すことができない」と述べている。さらに自伝には、「傷ついた医者のみが癒やす」とまで明記している (Sedgwick, 1994)。

Sedgwick (1994) は、そのような Jung の考えを「癒やすことのできない傷を負った癒やし手があり、矛盾することではあるが、癒やしの力をもたらすのはまさに傷を負ったことそのものだ」という考えが存在するのである」と要約した。

Grosebeck (1975) も同様に、「患者の中の医者」がいなければどんな癒やしも奏功しないが、「傷ついた癒やし手」原型、すなわち癒やし手も傷ついているということが、クライアントの中の癒やし手を活性化すると述べている。

また、Guggenbühl-Craig (1978) は、ケイロンを傷ついた癒やし手と見なしつつ、「医師が弱さとか病気とか傷とはまったく関係ないという考えを持ちはじめ、自分が力強い治療者であると感じる」こと、すなわち「傷というのはただ患者だけの傷なのであり、彼（筆者注：医師のこと）自身は安全だ」、「患者と呼ばれるのは、あわれな生き物で、彼とは全く異なった世界に住んでいる」といった考えを医師が持つようになると、「患者の中に治療的要因を付置する傷ついた医者というのはもはや存在しなくなる」と述べて、医師と患者の間が分断される危険性について、戒めている。そして、その分断を埋めるものとして「傷ついた癒やし手」原型を紹介している。

たとえば医学生は、その勉強の間に、自分がありとあらゆる病気にかかるのではないかという不安を抱くというが、「病気を自分の中にある一つの実存的な可能性として体験し、統合していく」ことで真の「傷ついた治療者」になっていくのだと言う（Guggenbühl-Craig, 1978）。

ここでは医師の例が示されているが、心理援助者においても、来談者と分断されることなく、同じ地平に立つことが求められよう。心理援助者も傷ついていればこそ、来談者の感じる痛みをみずからの傷に照らして感じ取り、そこに共感が生起しうるのだと考えられる。

### 2-3. 牧会カウンセリングにおける「傷ついた癒やし手」

カトリック司祭でありながらプロテスタントの神学校教授を務めた Nouwen (1972) は、人が他者の中に存在するためには、安全な距離をとり続けることはできないと述べて、自分の命を捨てて全人類を助けたイエス・キリストを「傷ついた癒やし手」と見なしている。そして、牧師がどのような奉仕に関わるにせよ、「彼が語ろうとする事柄自体が持つ苦悩によって彼自身の心が傷ついていないならば、彼の業は真正なものとして受け止められないだろう」と言う。

すなわち、他者の苦しみを自分の苦しみとして感じられないなら、牧師の奉仕はどのようなものも真正ではない、という意味に理解される。ここでは、牧師がみな、傷ついた癒やし手であることを求めていると受け取れる。牧会カウンセリングでは、心理援助者においてもまた、同様のことが要請されるのだと考えられる。この点は、心理療法の根幹たる共感の基盤としても、重要な指摘であろう。

なお、Nouwen (1972) の指摘するイエス・キリストの傷つきは、先述のギリシア神話の医神アスクレピオスの傷つきに近いように理解される。人類を救うためのイエス・キリストの自己犠牲は、死者をよみがえらせたことで自分自身の命を失うというアスクレピオスの物語とつながるものと推察されるからである。

### 3. 心理援助の世界における「傷ついた癒やし手」のジレンマ

「傷ついた癒やし手」という概念は、上述のように、20 世紀初頭に分析心理学や牧会カウンセリングの領域で一般化したという (Jackson, 2001)。両者は、心理援助者がみな「傷ついた癒やし手」であるべきだと考える立場と言えよう。

実際、心理援助者の傷つきがクライアントに対する共感性と理解、受容を育み、癒やしの過程で役立つという研究が見られている (Bennet, 1979)。また、重篤な精神障害を示した精神分析の祖である S. Freud や分析心理学の祖である C. G. Jung をはじめ、対人関係学派の H. S. Sullivan やアイデンティティ概念で知られる E. H. Erikson ら名だたる心理援助者が「傷ついた癒やし手」の典型として紹介されることもある (Goldwert, 1992; Lin, 2021)。

こうして「傷ついた癒やし手」という概念は、その後さらに敷衍され、心理的問題にとどまらず注目されている (Jackson, 2001)。たとえばヘルスケアの専門職では、心理学、心理療法、看護、医学、教育、ソーシャルワーク、メンタルヘルスなどにその適用が試みられてきた (Newcomb et al., 2015)。

しかし、「傷ついた癒やし手」には肯定的側面だけでなく、否定的側面もあることが指摘されている。たとえば「傷ついた癒やし手」は、臨床活動によって癒やし手自身を癒やそうとする隠された動機を持つという指摘も見られている (Henry, 1966)。これは、心理援助者が来談者を自分のために利用することとなり、職業倫理上の問題にもつながる。

また逆転移の取り扱いのまずさ、すなわち先述の不登校の例のように、心理援助者が来談者を自分と同一視してしまうことや、職業上の障害との関連も注目される (Gelso & Hayes, 2007)。後者の例としては、傷ついた医師は、患者に健康的習慣を促すことができず、最悪の場合、医師としての機能が障害されるという指摘があげられる (Graves, 2008)。これは、医師に限らず心理援助者においても生じうる問題であろう。

「傷ついた癒やし手」には肯定的側面と否定的側面の両面があるとすれば、そこにジレンマが生じる。果たして、傷つきを有する学生は、心理援助者としての適性を有するのだろうか。

すでに自分自身の傷つきが心理援助者を志望する動機となりうることを述べたが、実際に心理援助者は、社会心理学者よりも個人・家族問題の解決に影響されているという研究が見られる (Murphy & Halgin, 1995)。また、ソーシャルワーク領域での研究であるが、精神的苦悩を経験した学生の相当数が「傷ついた癒やし手」の概念に当てはまっていたという (Gilbert & Stickley, 2012)。

ただし、心理援助者を目指す動機として、自身の過去の傷つきや悩みの解決がすべてではなく、多様な動機の存在することも示されている (Norcross & Guy, 1989; 金沢・岩壁, 2013)。だが、自分自身の傷つきが志望動機のすべてではないとはいえ、それでも一定数の割合で傷つきを有する学生が心理援助者養成校に入学してくるという事実には変わらない

だろう。癒やしに関わる職種の志望者の中には、必ず「傷ついた癒やし手」が存在すると考えておく必要がある。

さらに学生は、他者への援助・理解を希求する自身の大学や職業選択への無意識的動機に気づいていないため (Bernett, 2007)、入学時はもちろん、在学中を通じて、学生がみずからの志望動機を熟考する機会や、教員がそれを精査する機会も不可欠である。志望動機に関する授業でのレポート執筆やグループワークなどで、なぜ自分が心理援助者を目指すのかという動機について考える機会を設ける必要がある。もし学生自身ではどうしても隠された動機に気づきにくい場合、教員から直裁にそれを指摘することは困難なので、必要に応じて教育カウンセリングなどを受けることを勧めてみるのもひとつの方法であろう。

#### 4. 「傷ついた癒やし手」は誰に癒やされるのか

##### 4-1. 傷つきとはなにか

先行研究では、「傷ついた癒やし手」の傷つきの例として、自身や家族の精神疾患・心理的問題から身体疾患 (Bradley, 2009; Mander, 2004 など)、トラウマ (Newcomb et al., 2015; Gonzales & Melton, 2017 など) といった、多様な問題があげられてきた。

しかし、あらゆる傷つきの例を目録化し、分類したとしても、おそらくどのような出来事が「傷ついた癒やし手」の傷つきとなるのかを定義することは困難であろう。なぜなら、たとえ類似した出来事であっても、個人によってその体験様式は異なるからである。そのため自分自身から見てももちろん、他者から見たのではそれが傷つきと認識されにくい。ましてやその体験がプラスに働くのかマイナスに働くのかは、予測困難である。

したがって、どのような体験であっても、それが当該の学生にとって傷つきとなっているかどうかは個別の検討を要する問題である。学修や心理援助に支障を来すような問題が生じ、その背景を探る中で、学生自身あるいは教員が傷つきに思い至ったり、傷つきを発見したりという場面が現実には多いのではないだろうか。

##### 4-2. 傷つきについて考える上での指針

そこで、傷つきを考える上で指針となる研究を以下に紹介する。どのような出来事であったかはともかく、それが現在、どのように学生に影響しており、またその影響がどのようなかたちで表れているかという観点が重要であると思われる。

特に、現在、あるいは予測できる範囲の将来にわたって、心理援助者養成教育を継続できるかどうか、さらに心理援助者として十全に機能できるかどうかの見極めに際して、有用となる観点である。

##### (1) 「促進的な傷つき」と「妨害的な傷つき」の区別

Ivey and Partington (2014) は、傷つきを心理援助者の成長にとって促進的なものと、逆に妨害的に働くものの2つに分けて考えている。

促進的な傷つきの特徴は、①傷つきと自分の人生上の出来事との関係に気づいているこ

と、②傷つきについて圧倒されたり防衛的になったりせずに、考えたり語ったりできること、③傷つきと臨床訓練への関心を関係づけられること、④傷つきが学生自身の建設的・変容のプロセスとかみ合っていた証拠の4つがあげられている。

これらは、学生の志望動機を精査したり、学生の現在の教育やトレーニングの進行状況などを把握しながらじゅうぶんなコミュニケーションを取ることを心がけていたりすれば、教員も気づきやすい観点であると思われる。したがって、学生に問題が生じる前の、予防的観点からも有益な示唆であろう。

## (2) 現時点での傷つきから回復の過程

「慢性／再発」、すなわち傷つきによるなんらかの障害が慢性化していたり、再発を繰り返す状態であったりすると、将来、心理援助者として機能するかどうか不確実な「障害型」と考えられるという (Zerubavel & Wright, 2012)。一方、「回復／外傷後成長」、すなわち傷つきによる障害からじゅうぶんに回復しており、場合によっては、自分自身の傷つきの克服や回復の体験から、人格的にも心理援助者としても成長を遂げており、さらに自分自身の傷つきをクライアントの回復促進に利用しうるかもしれない状態となったタイプは、心理援助者として「最適型」である (Zerubavel & Wright, 2012)。

したがって、「慢性／再発」が「傷ついた癒やし手」の否定的側面を、「回復／外傷後成長」が「傷ついた癒やし手」の肯定的側面を予測する指針となる。傷つきによる問題が学生に見られた場合、このような観点から教育やトレーニングの継続の可否、さらに職業として心理援助者を目指すことの可能性を、学生と教員が率直に相談し合えると良いだろう。

なお、現在「慢性／再発」の状態であっても、将来的に回復していく可能性もあることを忘れてはならない。「慢性／再発」なら早急に退学などの進路変更をしなければならない、という意味ではない。休学してまず傷つきに対するケアや医療を受け、回復を待つという対応もあろう。

## 4-3. 「傷ついた癒やし手」に対する教育実践

傷つきによって問題を生じている学生を発見した場合、教員は具体的にどのように教育的観点から指導していけば良いだろうか。そこで指針となる研究を紹介する。

①学生を自身の情緒体験に繋ぐこと、②学生が適切に不安を伝えること、③学生が心理療法で自己を効果的に使用すること、④学生がコーピングスキルとセルフケアを発達させることの4つが、指導者たる教員の目標となる (Trusty, et al., 2005)。

③の心理療法で自己を効果的に使用することについては、ロールプレイや試行カウンセリング、そして相談室でのケース担当とスーパービジョンなどを通じて、教員が中心となって指導できる部分である。

一方、学生を情緒的体験に繋ぐことは、通常の授業や実習指導などの中だけでは限界があるかも知れない。学生が適切に不安を伝えることや、コーピングスキルとセルフケアの発達も同様である。他の学生もいる中では、プライバシーの問題もあるし、そもそも個人

的問題を授業で扱うことはできないからである。したがって、後述するような外部の専門家による心理療法や医療の利用を視野に入れておいた方が良いだろう。

## 5. 教員のジレンマ—教員も葛藤し、傷ついている—

### 5-1. 教員—心理援助者葛藤

心理援助者養成校の教員は、ほとんどが心理援助者でもある。そこに教員としての指導・評価的側面と、心理援助者として来談者に対するかのような保護・抱え込み的側面の葛藤が生じる。ここではそれを、「教員—心理援助者葛藤」と名付けておく。

教員の役割は、傷つきにより問題を生じている学生を発見し、その傷つきを見極めて指導することである。学生に対するケアは、あくまで教員としての範囲に限られる。自分が心理援助者であるからといって、あたかも心理援助者が来談者に対して行うようなケアを行ったり、ましてや学生の心理療法を行ったりすることは出来ない。そのような多重関係は、心理療法に阻害的に働き、結果的に来談者の利益に反する結果を生じるので、各種の心理援助者団体の倫理綱領で禁じられている（日本心理臨床学会、1998 など）。

このような教員—心理援助者葛藤を認識し、自分自身の役割とその限界をわきまえておく必要がある。そうでないと、傷つきを有する学生に対して、教員自身が手詰まりとなり、無力感を生じて、不要な傷つきを受けることにもなりかねないからである。

また、中には自分自身が「傷ついた癒やし手」であるため、傷つきを有する学生に対して特別な反応を示してしまう教員もあるかもしれない。原則としては、複数の教員がチームとして関わるのが望ましい。いくら個々の教員が自分自身の反応に自覚的であろうとしても、そこには無意識レベルでの反応も含まれるため、互いの反応を確かめ合いながら対応を協議する必要があるからである。さらに前述のような傷ついた教員に対しては、傷つきを有する学生同様、外部の専門家の利用が推奨される。

### 5-2. 外部の専門家の利用

そもそもスーパーバイザーや同僚は、学生の傷つきに介入することに対して躊躇があり、学生本人もまた、他者に自分の傷つきについて開示しにくいという（Zerubavel & Wright, 2012）。おそらく、傷つきのほとんどが個人的なものであることが影響して、互いに触れにくい話題となりやすいものと推察される。

したがって、予防的観点としては、個々の学生が自己理解を深めるための学修が不可欠となる。これは、通常心理援助者養成教育においても基本となることだが、さらに学生の傷つきに対する自己認識を促すような教育プログラムの開発も必要なのかも知れない。

次に、傷つきにより学修の障害が明らかになった場合のケアとして、医学校では教員とは別に、心理援助者と、同業者のケアに専門性を有する医師の雇用が推奨されている（Graves, 2008）。心理援助者養成教育でも同様であろう。

これは、学内の学生相談室や保健管理センターに心理援助者や医師がいればよいという

意味ではない。あくまで同業者としての心理援助者のケアに専門性を有する心理援助者が必要なのである。

また、学内での対応には限界があるので、他機関へのリファーと、その機関との連携・協働も視野に入れておくべきである。そもそも学内に教員とは別の専門家を置くことはポスト的・経費的に困難でもあるため、現状では外部機関へのリファーが第一選択となることが多いようである。

## 6. おわりに

「傷ついた癒やし手」をめぐるのは、論文が少なく、アカデミックな文脈ではじゅうぶんに研究されて来ていない。だが、心理援助者養成教育の中では、「傷ついた癒やし手」のジレンマについて、今後も検討が必要であると思われる。とりわけ心理援助者を志望する学生の多様化により、学生に対するケアと教育という観点から、この問題は今後ますます重要性を増していくものと考えられる。

また、「傷ついた癒やし手」は、心理援助者に限らず、広く「癒やし」すなわち対人援助やケアに関わる職種に見られる問題である。さらに学生のみならず、すでに専門職となった人びとの中に、そしてもちろん教員の中にも、「傷ついた癒やし手」が存在する。それが肯定的に働いていれば良いが、否定的側面が顕著となり、専門職として十全に機能することが困難な場合もあるだろう。広範な癒やしの専門職へのサポートも、今後、心理援助者がチャレンジすべきテーマの一つである。

このような傷つきを他人事としてではなく、我がこととして、自分もまた過去の傷つきを有している、あるいはこれから傷つくかもしれない存在であるという認識に立って、心理援助者養成教育に関わっていきたい。

なお、本稿は、2020 年度中国四国心理学会第 76 回大会での『傷ついた癒やし手』は誰を癒やすのか、誰に癒やされるのか—心理援助者養成教育におけるジレンマ—（林，2021a）と 2021 年度日本心理臨床学会第 40 回大会での「心理援助者養成教育における『傷ついた癒やし手』に対するジレンマ—文献展望によって対応の指針をさぐる試み—」（林，2021b）の 2 つの発表を基にしている。発表に際して多くの先生方から貴重なコメントいただいた。そのことを最後に記して、謝辞に代えさせていただくこととする。

## 引用文献

- Bennet, G. (1979). *Patients and their Doctors: The journey through medical Care*. Baillière Tindall.
- Benziman, G., Kannai, R., & Ahmad, A. (2012). The wounded healer as cultural archetype. *Comparative Literature and Culture*, 14(1), 1-19. Retrieved October 10, 2021 from <http://docs.lib.purdue.edu/clcweb/vol14/iss1/>

- Bernett, M. (2007). What brings you here? An exploration of the unconscious motivations of those who choose to train and work as psychotherapists and counselors. *Psychodynamic Practice*, 13, 257-274.
- Bradley, N. (2009). Wounded healers. *British Journal of General Practice*, November, 803-804.
- Garfield, S. L. (1980). *Psychotherapy: An eclectic approach*. Wiley & Sons. S. L. ガーフィールド(高橋雅春・高橋依子訳) (1985)『心理療法—統合的アプローチ—』ナカニシヤ。
- Gelso, C. J., & Hayes, J. (2007). *Countertransference and the therapist's inner experience perils and possibilities*. Lawrence Erlbaum.
- Gilbert, P., & Stickley, T. (2012). "Wounded healers" : The role of lived-experience in mental health education and practice. *The Journal of Mental Health Training, Education and Practice*, 7(1), 33-41.
- Goldwert, M. (1992). *The wounded healers: Creative illness in the pioneers of depth psychology*. University Press of America.
- Gonzales, M., & Melton, L. (2017). The wounded healer. *Journal of the Advanced Practitioner in Oncology*, 8(5), 453-455.
- Graves, L. (2008). Teaching the wounded healer. *Medical Teacher*, 30, (pp.217-219).
- Groesebeck, C. J. (1975). The archetypal image of the wounded healer. *Journal of Analytical Psychology*, 20, 122-145.
- Guggenbühl-Craig, A. (1978). *Macht als Gefahr beim Heiler*. S. Karger AG. A. グッゲンビュール＝クレイグ (樋口和彦・安溪真一訳) (2019)『心理療法の光と影—援助専門家の《力》—』創元社。
- 林智一 (2021a)『『傷ついた癒やし手』は誰を癒やすのか、誰に癒やされるのか—心理援助者養成教育におけるジレンマ—』『中国四国心理学会論文集』第53巻、2頁。
- 林智一 (2021b)「心理援助者養成教育における『傷ついた癒やし手』に対するジレンマ—文献展望によって対応の指針をさぐる試み—」『日本心理臨床学会第40回大会発表論文集』41頁。
- Henry, W. E. (1966). Some observations on the lives of healers. *Human Development*, 9, 47-56.
- Hirsch, I. (1992). Extending Sullivan's interpersonalism. *Contemporary Psychoanalysis*, 28(4), 732-747.
- 一丸藤太郎・児玉憲一・塩山二郎 (2010)「第4章 心理学的処遇」鑓幹八郎・名島潤慈編著『心理臨床家の手引き第3版』誠信書房、64-146頁。
- Ivey, G., & Partington, T. (2014). Psychological woundedness and its evaluation in applications for clinical psychology training. *Clinical Psychology and Psychotherapy*, 21, 166-177.

- Jackson, S. W. (2001). The wounded healer. *Bulletin of the History of Medicine*, 75, 1-36.
- Jung, C. G. (1951). *Grundfragen der psychotherapy*. C. G. ユング (横山 博監訳) (2018)「心理療法の根本問題」『心理療法の実践』みすず書房、105-63 頁。
- 金沢吉展・岩壁茂 (2013)「心理臨床家を志した当初の動機と現在の動機に関する質的分析」『心理学紀要 (明治学院大学)』第 23 号、137-147 頁。
- 河合隼雄 (1992)『心理療法序説』岩波書店。
- 呉茂一 (1979)『ギリシア神話 上』新潮社。
- Lin, K. (2021). *Wounded healers: Triumphs and tribulations of pioneering psychotherapists*. Cambridge University Press.
- Murphy, R. A., & Halgin, R. P. (1995). Influences on the career choice of psychotherapists. *Professional Psychology: Research and Practice*, 26(4), 422-426.
- Newcomb, M., Burton, J., Edwards, N., & Hazelwood, Z. (2015). How Jung's concept of the wounded healer can guide learning and teaching in social work and human services. *Advances in Social Work & Welfare Education*, 17(2), 55-69.
- 日本心理臨床学会 (1998)「日本心理臨床学会倫理綱領」『心理臨床学研究』第 16 巻第 4 号、409-410 頁。
- Norcross, J. C., & Guy, J. D. (1989). Ten therapists: The process of becoming and being. In W. Dryden & L. Spurling (Eds.), *On Becoming a psychotherapist* (pp.215-239). Routledge.
- Nouwen, H. J. M. (1972). The wounded healer. Image. H. J. M. ナウエン (西垣二一・岸本和世訳) (1981)『傷ついた癒やし人—苦悩する現代社会と牧会者—』日本キリスト教団出版局。
- Sedgwick, D. (1994). *The wounded healer: Countertransference from a Jungian perspective*. Routledge. D. セジウィック (鈴木龍監訳) (1998)『ユング派と逆転移—癒やし手の傷つきを通して—』培風館。
- 鑓幹八郎 (2010)「心理臨床家の現況とアイデンティティ」鑓幹八郎・名島潤慈編著『心理臨床家の手引き第 3 版』誠信書房、1-17 頁。
- 寺崎真一郎 (2020)「スクールカウンセラーはどのように描かれてきたのか」『心理臨床の広場』第 12 巻第 2 号、26-27 頁。
- Trusty, J., Ng, K., & Watts, R. E. (2005). Model of effects of adult attachment on emotional empathy of counseling students. *Journal of Counseling & Development*, 83, 66-77.
- Zerubavel, N., & Wright, M. O. (2012). The dilemma of the wounded healer. *Psychotherapy*, 49, 482-491.